

# 琉球大学学術リポジトリ

## 2013年度大学教育等改善経費報告： 「英語資格演習Ⅰ・Ⅱ」の授業実践及びCLA テストと教育目標の対応について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東矢, 光代, 石川, 隆士 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/41032">http://hdl.handle.net/20.500.12000/41032</a>

## 2013 年度大学教育等改善経費報告

### 「英語資格演習Ⅰ・Ⅱ」の授業実践及び CLA テストと教育目標の対応について

東 矢 光 代 (法文学部教授)

石 川 隆 士 (法文学部教授)

#### 0. はじめに

本稿では前年度(2012年度)に引き続き、「英語文化学士教育プログラム」における英語能力育成のための実践と CLA テストの利用について報告する。前回の報告でも述べたように、「英語文化学士教育プログラム」では、2009年度入学生から「英語資格試験演習Ⅰ」(1年次前期必修)および「英語資格試験演習Ⅱ」(3年次後期必修)の2科目(以下、資格演習Ⅰ、Ⅱ)を提供し、「英語資格試験演習Ⅱ」の成績評価に外部客観テスト(英検・TOEIC・TOEFL)の指標を用いることで、卒業生の英語力の質保証を担保する試みを行なっている。すなわち同科目では、Aが「TOEIC 860点、TOEFL iBT、英検1級一次試験合格のうち最低1つをクリア」、Bが「英検準1級・TOEIC 700点・TOEFL iBT 77点のうち最低1つをクリア」、Cが「英検準1級1次試験通過・TOEIC 630点・TOEFL iBT 69点のうち最低1つをクリア」、Dが「TOEIC 600点・TOEFL iBT 66点のうち最低どちらかをクリア」という評価基準となっている。昨年度は初めての卒業生を輩出し、資格演習Ⅱの提供も2013年度後期で3年目を迎えた。以下にその取り組みと成果を報告する。また後半では、CLA テストと URGCC および英語文化学士教育プログラムの目標との対応関係について、昨年度の受験者に行なったアンケートの結果を報告する。

#### 1. 授業実践その1:「資格演習Ⅰ」(2013年度前期)

2013年前期の資格試験演習Ⅰは、再履修者等で膨れた人数を收容するために、初めて昼間主で2クラスを設けた。夜間主は1クラス提供のため、3クラスの提供とし、担当者3名で同じテキストを採用し、シラバスも統一したのが新しい試みである。また資格演習Ⅱの履修状況と、初年度の卒業生の到達状況を鑑み、資格試験を3クラスとも TOEIC に絞った指導とし、学期末に受講者全員に学内 TOEIC の受験を義務付けた。このうち東矢クラス(昼間主1組、30名)では、ラーニングポートフォリオの考え方を取り入れ、受講者全員に毎週コメントを書き入れるシートを貼り付けた A4 ファイルを準備し、クラス内模試の結果や毎週の復習テストを綴じていくようシステム化した。また自己の学習状況を把握しやすくするプリント類も作成し活用させた。ファイルは授業の最後に回収し、教員から一口コメントを書き入れて、翌週返すようにした。15週の授業は1回目のオリエンテーションを皮切りに、①クラス内での TOEIC 模試、②テキストを用いた TOEIC 問題内容の把握と解法演習及び毎回復習のための語彙小テストの実施、③学期末の学内 TOEIC 本番に向けたクラス内練習模試、④学内 TOEIC 受験(土曜日)、⑤学内 TOEIC の自己評価を含めた1学期間の学習の振り返り、という構成で展開した。

この実践からわかったことは、まず、学内 TOEIC を実際に受験させることのインパクトの大き

さである。①の学期初めの模試では多くの受講生が、TOEIC について良く知らない状態でテストに取り組むため、軒並み得点は低い。そのため「このままではいけない」という意識が芽生え、学期末の学内 TOEIC に向けてしっかり勉強しないといけないという動機づけにつながっているようであった。さらに③の本番直前に実施した2回目のクラス模試では、本番を意識して、また①からの変化を意識して取り組んでいたため、高い動機づけが持続されていた。さらに、テストの得点が実際に対外的に通用するものであることも、学生は肯定的に受け止めていた。わかったことの2つめは、テスト問題を解くときに留意すべきことを伝える、「解法」を教えるテキストを使用していたのだが、実際にその解き方を理解することと、それを使って問題が解けるようになることは同時進行ではない、という点であった。使用したテキストでは、リスニングとリーディングを1回分の演習として、異なるパートに取り組んでいくため、似たような解法（パート）が2クール目に出てくるような印象がある。受講生の毎週のコメントから、講義で学習した内容を頭では理解できても、すぐに得点の伸びにつながるわけではなく、同じパート演習の2回目、3回目、すなわち学期後半になってようやく解くときに使えるようになっていく様子が見て取れた。教えた側としては「教えたのだから、すぐそれを使って解けるようになるはず」と思いがちであるが、結果につなげていくためにはこの時間差を心に留めておくことが必要だと思い知らされた。最後に学習のポートフォリオとして試みたA4ファイルの活用であったが、教員側から見ても極めて有益だった。15週のコメント欄を一覧にし、小テストの点数なども書き込ませたおかげで、各学生の出欠状況や学期を通しての取組が一目瞭然であった。またふりかえりのレポートから、教員からのコメントが動機づけにつながったことも確認できた。

## 2. 実践その2:「資格演習Ⅱ」(2013年度後期)

昨年度初めての卒業生を輩出した資格演習Ⅱの講義提供は、今回で3期目となった。教員側でも機会を捉えて周知徹底に尽力していたが、昨年まで、学生の意識の浸透には時間がかかっていた感があった。しかし今年度は、すでに先輩などから、TOEIC 600点という最低基準をクリアしないと単位が取得できないことが伝わってきている様子であり、先延ばしにせず、しっかり受講しようとする雰囲気が強かった。学期末時点の成績は、法文昼夜間主と教育学部英語教育専修を合わせ、Aが4名、B15名、C20名、D10名、F19名であった。なお本稿執筆中にはTOEFLの指標の見直しが同時進行中であったため、TOEFLの成績での単位認定者は含んでおらず、またテスト成績が未提出の学生の評価が遅れていたため、以上は確定している受講生のみ結果である。Fの人数が多いことが見て取れるが、今年度から、学期中に基準に満たなかった場合Fを与える一般的な評価対応に切り替えたことで、卒業までの残り1年で英語力を伸ばす必要がある学生の把握は、より確実になったと言える。

資格試験演習Ⅱの1年目と2年目は、できるだけ昼夜クラスの指導内容も統一してきたが、受講生の実情に応じて、今回は担当教員が柔軟に対応している。2年間の指導においてわかったことは、3つの資格試験のうち、点数に刻みがあり、比較的内容が易しいものを含むTOEICを、最大公約数として、クラスでの指導の中心とするスタイルが効率的である、という点であった。そのため、前年度に引き続き、今年度もTOEICの指導を中心に行なった。昼間主クラスの取り組み

としては、Webclass を活用して授業内外で問題に多く当たらせること、その中でも一番難度が高い Part 3 & 4 (長いリスニング) と Part 7 (実用的な文章の内容読解) に集中して演習を行った。また資格演習 I と同様、個人のファイルを準備し、毎週の取り組みをコメントで記入させることで、自身の学習をふり返り分析できる機会を多く設ける仕組みを採用した。結果的には、もちろん全員ではないが、学期初めのクラス内模試よりも高得点の成績を修めた学生が、前年度より多く存在した印象を受ける。

卒業予定者に関しては、前年度に卒業が保留になった学生のうち、1 名が半年後に TOEIC 500 点を超え、前年度と同じ救済制度により追試を受け、卒業した。1 名は現在休学中である。今年度は 5 名が追試により合格し、1 名は 590 点であったため、追加のふりかえりレポートによる単位認定となった。しかし、500 点に満たず卒業延期になった学生が 1 名存在した。

以上の状況を鑑みると、教員と学生本人双方による、早めの学生の英語力の把握と組織的なケアが今後重要であると考え。今年度 600 点に満たず追試を受けた学生の状況を見ると、TOEIC を受け始めた時点での英語力が 400 点台という声が多く、100 点以上伸びても卒業に必要な 600 点に満たなかったケースが顕著である。この傾向は、昨年度の追試対象者の弁と一致する。590 点の学生が提出したレポートからは、3 年次になる前までの英語学習への取り組みが不十分であったことが読み取れ、3 年次に入ってから進路や就職活動と同時並行の焦りの中で、資格試験の勉強がうまく進まずに、最終的に時間切れで基準点に達成できなかったことが、改めて確認できた。これらを総合して、今年度前期の資格演習 I で、1 年次に対して学内 TOEIC を一斉受験させたことは、大きな意義がある。この結果を元に、学年の指導教員を中心に、2 年後の資格演習 II の受講までに 600 点到達に不安がある学生への指導強化が可能になり、またそれは今後必要な措置であると言える。

### 3. CLA と英語文化学士教育プログラムの達成目標に関するアンケート調査

今年度予定していた第 2 回目の CLA (College Learning Assessment) テストであるが、昨年受験した学生のほとんどが留学となり、組織的実施のための人数を確保できなかったため、今回は止むを得ず見送ることとした。その代り、平成 25 年 2 月に CLA を受験した 40 人のうち、少人数ではあるが今年度すでに卒業を控えている在籍している学生を対象に CLA と英語文化学士教育プログラムの達成目標に関するアンケートを実施した。

CLA の概要については本センター報の前号、第 16 号に掲載してあるが、改めてまとめると以下の通りになる。CLA は米国の CAE (Council for Aid to Education) が統括し、批評的思考、分析力、問題解決力を評価するオンラインテストで、主たる目的は高等教育機関における教育、学習環境の検証、改善である。テスト内容は「批評的思考」、「分析力」、「問題解決力」を測定するための 2 種類のテストのいずれかに取り組むことが求められ受験者はそれを選ぶことができない。ひとつは、与えられた役割に沿って情報を集め体系化するという問題形式 (Performance Task) であり、もう一つが、与えられた課題に対する主張をまとめるという (Make-An-Argument) と他者の主張に対して批評を行うという Critique-An-Argument) の両者を行うというものである。解答時間はいずれも 90 分で、いずれのテストもアウトプットは

ライティングであるというのが特徴である。その通り、評価基準も「Analytic Reasoning & Evaluation (分析力、批評力)」、「Writing Effectiveness (効果的な記述表現)」、「Writing Mechanics (組織だった記述表現)」、「Problem Solving (問題解決力)」となっており、「言語の形でいかに表現するか」という点に力点が置かれている。

今回のアンケートは英語文化学士教育プログラムのディプロマ・ポリシーにおける達成目標の達成度指標として CLA がどれほどの対応関係を持ちうるかについてのものである。その際、英語文化専攻を含む琉球大学の全学的学習達成目標である URGCC のものと、英語文化学士教育プログラム独自の達成目標両方について調査を行った。実際のアンケート用紙は以下の通りであり、1 において URGCC の学生達成度目標と CLA との対応関係について、そして 2 においては英語文化学士教育プログラムとの対応関係について、それぞれ四分法で聞いている。そして最後に 3 として自由記述欄を設けた。

### CLA と英語文化専攻の達成目標に関するアンケート

本アンケートは平成 25 年琉球大学、大学教育改善等経費の「学習成果の確認及び把握のための取組に係る経費」(責任者：石川隆士)により実施されるものです。回答および分析結果につきましては、琉球大学の教育改善に関わる調査、研究以外の目的には一切使用しません。

平成 25 年 2 月に実施された CLA を受験した感想についてお聞かせください。

1. CLA の試験内容と URGCC の対応関係の強さについて、それぞれひとつずつ選んでください。(1. とても強い関係がある、2. 強い関係がある、3. あまり関係がない、4. 全く関係がない)

自律性	1	2	3	4
社会性	1	2	3	4
地域・国際性	1	2	3	4
コミュニケーション・スキル	1	2	3	4
情報リテラシー	1	2	3	4
問題解決力	1	2	3	4
専門性	1	2	3	4

2. CLA の試験内容と英語文化専攻の達成目標の対応関係の強さについて、それぞれひとつずつ選んでください。(1. とても強い関係がある、2. 強い関係がある、3. あまり関係がない、4. 全く関係がない)

国際的な場面で活躍するための高度な英語運用能力

1 2 3 4

自主的に情報を収集し、それを正確に整理・分析することによって、主体的な見解を導く能力

1 2 3 4

自らの見解と意見を、説得力ある表現で伝達することのできる能力

1 2 3 4

他者との議論、意見交換を通して多様な見解や価値観を学び、自らの意見に反映させる能力

1 2 3 4

3. その他、CLA テストに関する感想、意見、要望等があれば自由にお書きください

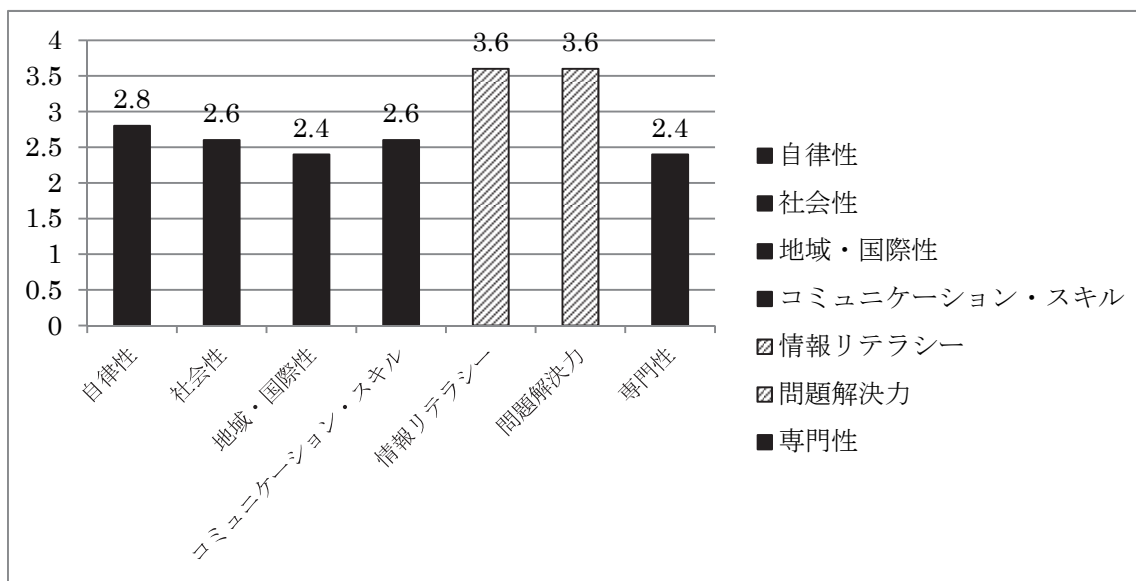
ご協力ありがとうございました。

上述の通り、昨年度 CLA を受験し、今年度本学に在籍している学生は少数のため、回答数は5と非常に低い数値であったが、大きな傾向だけはつかめた。以下その調査結果である。アンケートの結果の集計について今回は、質問項目の中で関係性が強い方から1, 2, 3, 4と並べてしまったため、それを数値化するにあたって1を4点、2を3点、3を2点、4を1点と逆転させた。次回の調査では質問項目の時点で関係性と数値が昇順で対応するように修正したい。

### 項目1：URGCCの学生達成度目標とCLAとの対応関係の結果

図1は、項目1の各問について、それぞれの平均点をグラフ化したものである。N=5と正規分布を描くにはほど遠いので、標準偏差の代わりに、参考として得点レンジも記載することにした。

一見して分かるようにURGCCの情報リテラシーと問題解決力との関係性が、平均3.6と強く出ていることがわかる。これは、自由記述欄からも明らかで、「CLAのような形式で回答時間やテーマなどを変えて日々のタスクとして授業で行えば、情報処理能力はもちろん問題に対しての多角的かつ柔軟なアイデアや意見の養成が可能だと思う」、「時間内に要約する力や自分で問題解決する力がとても求められていることが分かりました」、「ただ英語に関する知識だけではなく、その知識をどのように使うのかという実践能力や与えられた情報をどのように体系化しまとめるのかという、プレゼンテーション能力など、実際に社会で必要とされる能力を他の試験よりもはかることが出来るのではないかと思った」などの回答にも、その関連性の強さが表れている。前述のCLAテストの概要を鑑みれば、情報の収集、取捨選択という情報リテラシー、与えられた課題に明確な解決方法を見出していくという問題解決力の双方が要求されているということは明らかで、受験者の実感もそれを裏付けていると言えよう。



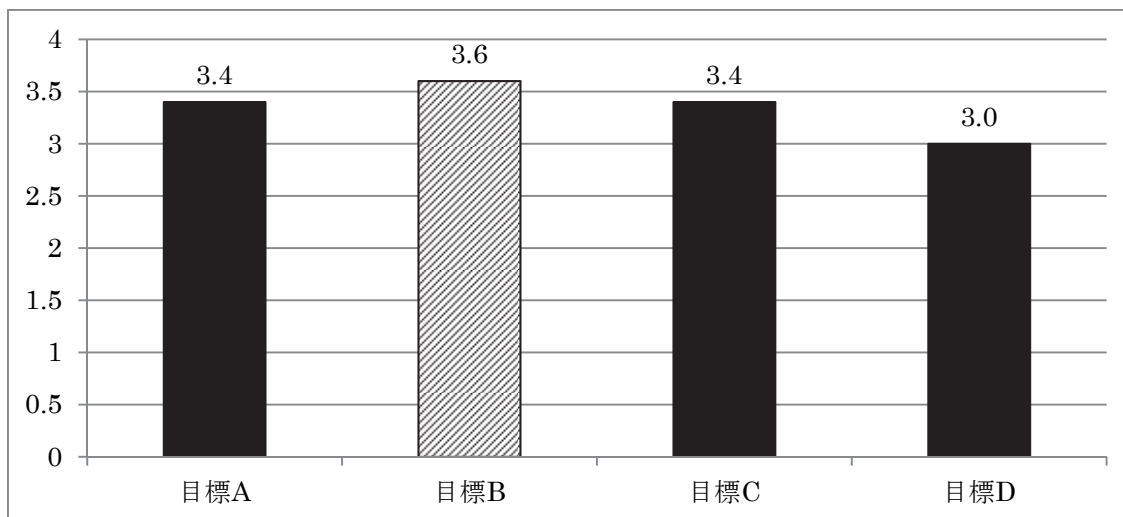
	自律性	社会性	地域・国際性	コミュニケーション・スキル	情報リテラシー	問題解決力	専門性
得点レンジ	2～4	2～3	1～4	1～4	2～4	2～4	1～4

図1. CLA と URGCC の 7つの学習教育目標との対応関係

情報リテラシーと問題解決力以外の5項目に関しては、平均が2.4から2.8の間にあり、ドングリの背比べといったところである。 $N=5$ という少ないデータ数で、個人による回答幅も大きいことが否めないが、平均値としては反転しても肯定的な数値(2以上)であるため、一定の関係性は見られるといえるであろう。

## 項目2：英語文化学士教育プログラムとCLAの対応関係

次にアンケートの項目2において、英語文化学士教育プログラムの掲げる4つの目標(図2の目標A～D)とCLAについても対応関係を調査した。結果は図2のとおりである。



目標A:	国際的な場面で活躍するための高度な英語運用能力
目標B:	自主的に情報を収集し、それを正確に整理・分析することによって、主体的な見解を導く能力
目標C:	自らの見解と意見を、説得力ある表現で伝達することのできる能力
目標D:	他者との議論、意見交換を通して多様な見解や価値観を学び、自らの意見に反映させる能力

	目標 A	目標 B	目標 C	目標 D
得点レンジ	2～4	2～4	2～4	2～4

図2. CLA と英語文化学士教育プログラムの学習教育目標との対応関係

項目ごとの大きな差異はないとはいえ、こちらでも情報収集、分析、見解としての体系化に関わる目標 B がやや強い関連性を示している。また目標 D に比べ、目標 A、C が高く見られるのも、問題が英語であるという部分と、見解や意見の伝達能力が情報の体系化と強い結びつきを持っているという点が理由にあると考えられる。自由記述回答欄にも「時折『文系、しかも英語文化学科卒であることがそれが実社会でどう役に立つのか』と聞かれますが、CLA はそういった疑問に対する答えのひとつだと感じました。インプットされた情報を自分の言葉や解釈等を織り交ぜながら的確にアウトプットするという作業がいかに重要な工程であるか、そしてそれこそが英語を学んでいてもいなくとも、日常のなかで私たちに求められる実践的なスキルだということを実感できるのではないかと考えます」、 「他の英語資格試験とは違い、自ら考えて記述する形式だったので、実践的な英語運用能力をはかることのできる試験だったと思う」といった回答があり、英語と情報処理能力、見解の組織化との結びつきを強く意識づけられる試験であったと考えられる。

目標 D については、試験内容として他者の情報を参考にして自分の意見に反映させたり、他者の意見に対し批判的に評する「Critical Thinking」の要素も十分あるのだが、実際にはコンピュータ上で行う単独作業であるため、議論とか意見交換とかの実感はないのは当然であり、値がやや低くなったのも当然といえる。こうした点を踏まえると、URGCC 全体の学習教育目標と比較して英語文化学士教育プログラムの学習教育目標との関係性が総



じて強いといえ、当該プログラムの達成度評価指標として適切な選択肢と考えられる。いずれにせよ、試験の継続的な実施とアンケートデータの蓄積によって、その適切さの評価および、それを基盤とした達成度自体の計測の充実を図りたい。

謝辞

\*本事業は平成25年度大学教育等改善経費の補助によって実施されました。記して感謝いたします。